

目次

動物の目のつく言葉【日本語編】.....	3
動物の目のつく言葉【英語編】.....	5
動物とヒトの涙の違いとは.....	7
「目」のつく地名 ～北海道・東北地方編(1)～	9
「目」のつく地名 ～北海道・東北地方編(2)～	11
「目」のつく地名 ～関東・中部地方編～	13
「目」のつく地名 ～西日本編～	15
名前に「目」のつく動物	17
コンタクトレンズの歴史	19
ザトウクジラは目が見えないの?～座頭の動物たち(1)～.....	21
哺乳類が座頭になったら?～座頭の動物たち(2)～.....	23
『二十四の瞳』英語でどう訳す?.....	25
動物も眼の病気になるの?.....	27

動物の出目、ヒトの奥目	29
世界が恐れた眼病とは ～トラコーマの歴史(1)～	31
日本人とトラコーマ ～トラコーマの歴史(2)～	33
人類を繁栄させたヒトの目の特徴とは?	35
こんなに違う、肉食動物と草食動物の眼.....	37
動物の遠視と近視.....	39
眼は心の窓 ～心因性視力低下とは～	41
比翼の鳥の泣き別れ ～網膜剥離って何?～.....	43
目のつく地名(1)	45
目のつく地名(2)	49
目のつく地名(3)	54

動物の目のつく言葉【日本語編】

梅雨に入りましたね、ムトウ先生。「蛇の目でお迎え～」なんて歌もありましたが、最近はあまり言われなくなりましたね。

「蛇の目傘」の「蛇の目」は、太い輪の形を意味する言葉です。形がヘビの目に似ているところから名付けられたのですよ。日本語には、このような動物の目に例えた言葉がたくさんありますね。例えば、足の裏などにできる「魚の目」は、形がサカナの目に似ていること、サカナの目を食べるとなりやすいという言い伝えから名付けられたようです。

ほかにも「猫の目」は「巨人打線はしょっちゅう打順が変わる猫の目攻撃だ」のように使われます。めまぐるしく変化するものの意ですね。瞳孔は、暗い所では光を多く採り入れるために大きく、明るい所では反対に小さくなります。

ネコはヒトに比べて瞳孔の大きさの変化が非常にすばやいので、めまぐるしく変わるものに対して例えに使われるのでしょう。



確かにそうですね。ほかにもそのような例えを使った言葉があるのでしょいか。

夜になると見えなくなる夜盲症のことを「鳥目」といいますね。目の網膜の視細胞には、錐体と杆体の二種類があります。

錐体は昼間明るいところで働き、杆体は夜働きます。ト리는網膜の視細胞すべてが錐体で構成されています。ですから昼間はヒト以上に視力が優れていますが、夜は全く見えなくなっています。

鳥の目が夜見えないのは、そのような訳なのですね。

鳥といえば、「**鶉の目鷹の目**」は、ウヤタカが獲物を探するときのように、熱心に物を探す目つきや様子をいいます。ウヤタカは実際にヒトよりも視力のよい動物です。ウは空気中でも水中でも物がよく見えます。ウの目の水晶体はピント合わせの力が非常に強力なので、ヒトのように水中で遠視になることもありません。またタカは、ヒトの八倍以上視力が優れていると言われています。タカの視力が優れているのは、網膜に錐体が非常に機能的に集中して分布しているからです。

古代東洋人が、いかに自然に対して鋭い観察力を持っていたかを物語っていますね。

東洋だけでなく、西洋にも動物の目に例えた言葉がありますよ。次回は西洋についても見てみましょう。

動物の目のつく言葉【英語編】

前回は動物の眼に例えた言葉を、日本語表現においてお話しいただきました。今回は西洋における動物の目の例えについてお聞かせください。

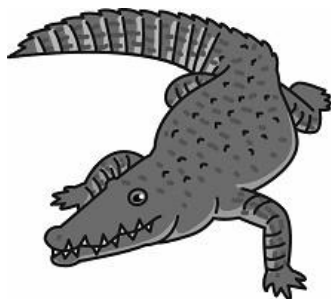
英語の「cast [make] sheep's eye at~ (ヒツジの目を投げかける)」、これは「~を流し目で見る、~に秋波を送る」という意味で使われているようです。ライオンなどの肉食動物の目は、前方がよく見えるよう顔の前面に並んでついています。草食動物であるヒツジの目は、顔の側面についていて、どこから敵が襲ってきてもすぐに発見できるようになっています。ヒツジは同時にその目が切れ長であるため、何となく流し目をされているように感じたのでしょうか。

ヒツジの目をそのようにとらえるとは、面白いですね。他にはどのようなものがありますか。

cat's eye (ネコの目) は宝石の猫目石のことですね。ネコは、網膜の外側に反射層を持っています。外から直接網膜に達する光だけでなく、網膜をいったん通過した光を反射層で反射させ、もう一度感知するようになっています。反射した光が目の外にも出ますから、ネコの目は薄暗闇でキラキラ光るのです。ちょうど猫目石がそのように光る石なので、cat's eyeと名付けられたのでしょう。cat's eyeは網膜芽細胞腫などの際に、目がキラキラと光る場合の症候名としても使われます。

症候群の表現が、動物の目に由来することもあるのですね。

有名なものに、**crocodile tears** (ワニの涙)があります。これは先天性または顔面神経の麻痺後に起こるもので、顔面神経の配線が混線することによって、飲食時に唾液だけでなく涙も同時に出てしまう症状です。実際にワニが飲食時に涙を流すことはありませんが、瞬膜が角膜上の余分な水分をぬぐっている様子がそう見えるのでしょう。現在、一般的な英会話でcrocodile tearsといえば、そら涙を流す、しらじらしく流す涙を意味しています。



「目」「eye」を用いた表現には実にさまざまなものがあるのですね。文化の東西を問わず、昔の人々の観察眼には驚かされます。

動物とヒトの涙の違いとは

△トウ先生、この夏は松尾芭蕉の足跡を追って小旅行に行ってみようと思うのですよ。

芭蕉の俳句を読むと、実に旅情を誘われますね。私もみちのくの旅に出てみたいものです。松尾芭蕉の『奥の細道』に、

行く春や鳥啼き魚の
目は泪

という有名な句がありますね。この句の大意は、春はもう過ぎ去ろうとしている、行く春と



の別れを惜んでいるのは人間ばかりではないようだ。鳥は悲しげに啼き、魚の目は涙にうるんでいる、という意味で、非常に趣の深い句です。しかし、せっかくの名句をあげつらうわけではありませんが、魚の目に涙というのはいえぬことです。

涙はそもそも目が乾燥しないためのもので、水中で生活をする魚の目はいつも潤っていますから、魚の目には涙はありません。涙が存在するのは、陸上生活をする両生類以上の生物です。

そうなると、「行く春や鳥啼き猫の目は泪」とでもすべきでしょうか。句の情趣はかなり落ちてしまいますが。

なかなか面白いのですが、残念ながらそれもないでしょう。

悲しみや喜びで涙が出る、感情の高揚によって涙が出てくるのは、数ある動物の中でも私たち人間だけの特性だからなのです。ヨーロッパでは、獲物をとらえて水面に浮かび上がったワニが涙を流すので、ワニは慈悲深い動物で、獲物への慈悲の涙を流すと言い伝えられてきましたが、これも瞬膜が水をぬぐう作用に過ぎず、感情による涙ではありません。

感情による涙を流すのは人間だけなのですか。

ところで涙といえば、「鬼の目にも涙」とか「スズメの涙」など、言葉の例えにも使われますね。

「鬼の目にも涙」という場合の「涙」は、ワニに言われたような慈悲の意味ですね。しかし「スズメの涙」というのはちょっと違って、小さいもの、少ないものの意味です。

「涙金(なみだきん)」のような使い方です。スズメのように小さな動物の、しかも涙のように小さいもの、ということで、極めて小さいものを意味する場合に使われています。

私たちにとって身近な「涙」ですが、こうして見ると、さまざまな発見があるのですね。

「目」のつく地名 ～北海道・東北地方 編（１）～

この夏は暑いですね、ムトウ先生。外出するのもためらわれてしまいます…

本当にそうですね。今回は、日本の「目」のつく地名を探して、地図をたどってみませんか。

そのような旅も一興ですよ。実際みてみると、日本には「目」のつく地名が七十以上あるのです。

意外にあるものですね。その由来も様々なのでしょうか。

北海道知床半島の羅臼町のあたりは目梨郡（めなしぐん）と呼ばれています。これはアイヌ語のメナシの当て字です。メナシというのは東方の意味で、江戸時代までは襟裳岬の東方、即ち北海道の東半分をメナシと呼んでいたようですね。明治二年の北海道区画整理の際に、知床半島のあたりだけを目梨郡としたようです。

北海道には他にもアイヌ語由来の地名があります。ニセコ連邦の外れにあり、連邦で二番目に高い山の目国内岳（めくまないだけ）もそうです。メクンナイ（猫が鳴く）という説と、マクン（奥にある）＋クンネ（暗い）という説があります。いずれにしても、いつでも猫が鳴いているような暗い山という意味なのでしょうね。

なるほど。何故地名に「目」がつくのか、由来も一緒に見ていくと面白そうですね。

秋田県八郎潟の東方にあるのが五城目（ごじょうめ）町です。この場合の「目」は中心を意味するようです。中世の頃この辺りに五つの城があり、その中心として栄えた土地であるため五城目という名が付いたという説があります。五城目



町には馬場目川、馬場目岳という地名がありますが、これもまた中心を意味した目のようです。この辺りは牧場であり、馬の産地の中心に位置するために命名されたようですね。また秋田県南部には西目（にしめ）町があります。これは西側が海に面しているために、西面→西メン→西メ→西目となったようです。西目という地名は日本全国に多く見られます。鶴岡市西目、熊本天草郡松島町西目、鹿児島県阿久根市西目など、いずれも西側が海に面しています。

「目」という字がさまざまな意味を持ち、そこから「目」のつく地名を多く広がっていくようになったのですね。まだまだ興味は尽きませんね。次回もまたお聞かせください。

「目」のつく地名 ～北海道・東北地方編（２）～

前回は日本に「目」のつく地名についてのお話でした。東北地方だけでも、「目」のつく地名は語りつくせぬほどありそうですね。

青森県の川目、大川目、西川目、下清水目…、岩手県の内川目、立川目、横川目、外川目…、宮城県の反目（そりめ）、桜ノ目、塚ノ目、霞目（かすみのめ）…、山形県の落野目、糠野目…など、東北地方にはやたらと「目」のつく地名が多いようです。

そして興味深いのは、東北地方の北部には「——川目」という地名が多く、南部には「——の目」という地名が多くなることです。「——の目」という地名は栃木県まで及んでいます。

本当にいろいろありますね。この「目」にも意味や由来があるのでしょうか。

この東北地方独特といえる「——目」という地名の目の字は、本来「べ」であったものが「メ」に転化したものであろうと思われます。秋田県阿仁町に岩野目沢という地名がありますが、この辺は非常に岩場の多い辺りです。そんな所から、岩の多い辺り→岩の辺（いわのべ）と本来名付けられたと考えるとわかりやすいでしょう。

仙台市の霞目はよく霞がかかる所であり、一関市の山目は奥州街道筋でここだけ山が迫っている地形です。本来は、霞の辺(かすみのべ)山の辺(やまのべ)と命名されたのではないのでしょうか。



北部の「——川目」という地名も同様に、「——川辺」

がいつしか「——川目」に転化していったものなのでしょうね。

川目、山目というと、関東人にとって奇異な名称ですが、川辺、山辺と書き換えてみると違和感がなくなりますね。東北地方の「——メ」という地名は殆どが本来は「——べ」であったのだろうと思われます。

「目」のつく地名を見ていくだけでも、その土地の文化を垣間見るようで興味深いですね。またいずれ他の地方についてもお話していきます。

「目」のつく地名 ～ 関東・中部地方編～

先日北海道や東北の「目」のつく地名のお話はとても興味深いものでした。そういえば、東京にも「目白」「目黒」という「目」のつく地名がありましたね。

どちらも山手線にある駅名ですから、初めて東京に来た人には紛らわしいものでしょうね。この二つの地名の由来は江戸時代にさかのぼります。江戸には五つの不動堂がありました。現在の目黒区下目黒にあった目黒不動、豊島区目白にあった目白不動、ほか、世田谷区に目青不動、台東区に目黄不動、文京区に目赤不動、この五つは五色不動と呼ばれてあつい信仰を受けていました。五つの内現在も地名として残っているのが目白と目黒の二つなのです。

目白・目黒にそのような由来があるとは知りませんでした。

東京近郊にも「目」のつく地名はいくつか見ることが出来ますね。日光市の笹目倉山(ささめくらやま)、東京都と秩父市の境界にある天目山(てんもくざん)、神奈川県の日久尻川(めくじりがわ)、金目川(かなめがわ)などがあります。

笹目倉山はササメ(篠竹)が多い山という意味で、当て字で目の字が使われているだけのようです。天目山というのは元々中国にある山ですが、これに似ているということで名付けられたようです。天目山は昔、日本からも禅僧が修行に出かけた所で、この

僧達がこの地の名産品を持ち帰って日本でも作るようになったのが天目茶碗なのです。

それが天目茶碗のルーツなのですね。いにしえの話を紐解くのは面白いものです。

話といえば、中部地方にも面白い伝説のある「目」のつく地名がありますよ。石川県の白山国立公園の中の目附谷川（めつごたにがわ）には次のような話が伝わっています。

「昔、白山が女人禁制だった頃あるうぬぼれの強い美人がいた。女人禁制といえども、自分程の美人なら許されるであろうと、白山の頂上へ登って行った。八合目に来ると大入道が現れ、これ以上行ってはならんとどなったが、女は気にもとめずに登っていった。白山の神はこれを大いに怒り、その女を二つに割り、片方を谷へ投げつけた。それ以来その谷の近くを通ると、片足の女が立っていたり、わらじが片方だけあったりするという。現在でもこの谷に住むイワナは片目であるという」。

この地方では、片目のことをメッコといい、メッコ谷が目附谷になったと考えられています。



ちょっとゾツとするようなお話です。なかなか夏の夜にふさわしい趣がありますね。

「目」のつく地名～西日本編～

北海道から中部にかけて「目」のつく地名のお話を伺ってきましたが、あとは西日本ですね。

西日本には、歴史や伝説に由来を持つ地名がありますので、見ていきましょう。奈良市に布目川（ぬのめがわ）という川があります。布目の目は部の意味らしく、昔「はたおり」の人が多くいたため、布部即ち服部（服織部）を由来に名付けられたようです。同様に、鹿児島県に勝目（かちめ）という地名がありますが、これは鍛冶部からきているようですね。

また、三重県の観光地、赤目一志峡（あかめいっしきょう）をご存知でしょうか。南北朝の頃活躍した北畠氏の史跡の多い所ですね。ここは有名な赤目

四十八滝があります。「役（えん）の小角（おつの）」がこの地で滝に向かって修行している時に、不動明王が牛に乗って出現し、その牛の目が赤かったために赤目の名が付いたという話があります。



「役の小角」は、飛鳥時代の呪術者ですね。現在でも、ゆかりの史跡が多く残っています。

山口県山口市から萩市に抜ける山道の静かな山峡を流れているのが蔵目喜川（ぞうめきがわ）です。この名の由来は「ざわめき」

からきたそうです。この辺りは奈良時代から銅山が開かれていました。関ヶ原合戦後、毛利氏は藩の財政上この銅山を重視し、大量の人夫を送り込んで採掘に当たらせました。一時は大勢の人が集いざわめき、賑わったといえます。

関ヶ原で敗軍となった毛利氏は大幅に減封されたのでしたね。財政上の苦勞があり、銅山を積極的に採掘したのでしょうか。

熊本県には、人吉市内から西へ7km、鹿目（かなめ）側の溪谷の奥に鹿目の滝があります。鹿目の部落は相良藩と薩摩藩の重要な国境の一つで、名の由来は「要」のようです。

この鹿目の部落に浄瑠璃にうたわれた河合又五郎の屋敷跡があります。河合又五郎は叔父を殺したために、その息子と息子の義理の兄である荒木又右衛門に、伊賀の上野の鍵屋の辻で敵討ちにあってしまいます。これが、曾我兄弟、赤穂浪士とともに日本三大敵討ちのひとつに数えられる「鍵屋の辻」ですね。河合又五郎は、返り討ちした場合には鹿目の部落に帰るつもりでいたようです。

帰ることは叶わなかったわけですね。全国にある「目」のつく地名を見てきましたが、その由来は実にさまざまでした。地名の成り立ちから、地方の歴史をひもといていくのも一興ですね。

名前に「目」のつく動物

△トウ先生、ヤツメウナギは目にいいといいますが、本当なのでしょうか。

患者さんからもそのように尋ねられることがありますね。ヤツメウナギは目のうしろに七対の外鰓孔(がいさいこう)があり、目が八つあるように見えるので、この名がついたのです。目が八つもあるのだから眼病に効くはずだと信じられてきたのでしょう。

ただ、古くからの民間の言い伝えというのは、それ自体は非科学的でも結果としては正しいことが多くあります。目が八つあるからというのではなく、ビタミンAを多量に含んでいるので、鳥目(夜盲症)や目の疲労回復には効果的な食物なのです。

そうなのですね！そういえばヤツメウナギのように、動物の中には名前に「メガネ」や「目」がつくものがありますね。

「メガネ」の名がつく動物としては、メガネザル、メガネウオ、メガネカイマン、メガネグマ…など、色々ありますね。マレー諸島の森林に生息するメガネザルはメガネでもかけているように大きな目をしています。メガネザルは夜行性で昆虫やトカゲなどを食糧としており、暗い所でもよく見えるように大きな目が必要になったのでしょう。

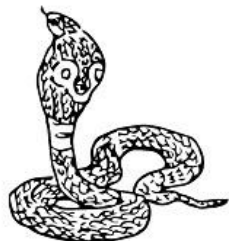


メガネザル

メガネカイマンはアメリカに生息するワニで、メガネウオはオコゼの一種です。これもそれぞれ目が大きいためにその名がつけられました。

目が大きくて目立つ動物が「メガネ」の名を冠するようになったのですか。

目立つ箇所が必ずしも目ではない場合もありますね。メガネグマやメガネオオコウモリは、目の周りに白い輪の模様があるので、この名前がつけられています。また、メガネヘビは台湾コブラのことで、首を広げて敵を威圧するとき首にメガネのような模様があることから、この名がつけられました。



メガネヘビ

魚には目のつく名前が多いですね。メダカ、メバル、デメキン、ヒラメなどでしょうか。

メダカは目高、メバルは目張、どちらも体の割に目が大きいことから名付けられています。ほか、メカジキは「目梶木」と書かれることが多いようですが、「女舵木」と当て字されることもあります。マカジキ(真梶木)と比べてその身が色白なので、女性的という意味からメスのカジキ、つまりメカジキと名付けられたのではないかと思われます。そうすると「目梶木」という漢字は、実は妥当ではないかもしれませぬ。

コンタクトレンズの歴史

以前お話しいただいたメガネの歴史は、たいへん興味深いものでした。メガネ同様、コンタクトレンズも広く使われていますが、コンタクトレンズはいつ頃出来たのでしょうか。

眼鏡レンズには2つの欠点があります。眼鏡レンズが眼球から離れて存在していること、そして眼鏡レンズは顔面に固定され、眼球とともに動くものではないことです。この2つの欠点を解消するためには、レンズを出来る限り眼球に近づけ眼球とともに動くようにする、つまり角膜にコンタクト(接触)させればよいわけです。このような発想は19世紀中頃に生まれ、1920年代頃から実際に作られ使用されるようになりました。

そんなに以前から、コンタクトレンズは作られていたのですか。

ただ、当時のコンタクトレンズの原料はガラスであったため、割れやすく、割れると割面が鋭利になること、そしてそもそも角膜にキズがつきやすいなどの理由で、広く普及するには至りませんでした。

1940年代以降、プラスチック工業が発達し、これはガラスよりも割れにくく、角膜に対する刺激が少ないという長所を持っていました。これをレンズとして



用いるようになってから、コンタクトレンズが爆発的に普及するようになったのです。

ハードコンタクトレンズのはじまりですね。爆発的に普及したということは、多くの人が目の見え方に悩んでいたのでしょうね。

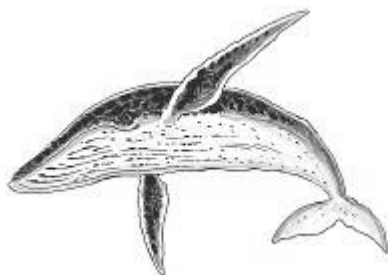
特に強度の屈折異常や不同視を持つ人達にとっては、眼鏡では得られない「見やすさ」が与えられたわけです。ただ、一部の人達はその恩恵にあずかれませんでした。ハードレンズというものは、装用時にいくばくか異物感を伴うものです。その痛みには耐えられない人々は、結局「ハードレンズ」の恩恵に浴せなかったのです。そこで、装用時に痛くないレンズの開発がすすめられました。こうして出来たのがソフトコンタクトレンズです。柔らかく痛くないソフトレンズにもまだ欠点はありますが、近年、ハードレンズ、ソフトレンズ両者の長所を取り入れたレンズも開発されてきています。

理想のコンタクトレンズのために、今もなお技術は進歩を続けているのですね。

ザトウクジラは目が見えないの？ ～座頭の動物たち（1）～

△トウ先生、ザトウクジラというクジラがありますが、「座頭」と言うからには目が見えていないということなのでしょうか。

「座頭」は江戸期における盲人の階級の一つですね。一昔前には、『座頭市物語』という映画が一世を風靡したこともあります。



ザトウクジラはヒゲクジラの一
種ですが、遊泳速度が遅い

ので目が見えないと連想され、この名がつけられたそうですよ。もともとクジラはあまり目が働いていませんが、ほかのクジラが俊敏であるのにザトウクジラだけがもたもた動くので、目が不自由であるように考えられたのです。

目が見えていないということではないのですね。座頭市は、目の不自由な主人公が活躍する物語でしたが、もしも動物が座頭になったらどうなるのでしょうか？

まず魚類の場合はどうでしょう。この疑問に答える興味深い事実があります。あるとき漁師が海で盲目のタラを釣り上げたことがありました。腹を切り開いたところ、胃には食物がいっぱいだったそうです。つまりタラは目が見えなくてもエサをあさることができたのです。

このことを知った人が実験を行った結果、魚は視覚よりも臭覚を使ってエサを捕らえることがわかりました。

両生類や爬虫類も臭覚が鋭いので、座頭になったとしても何とか生き延びられるかもしれませんが。しかし、トカゲやカメレオンなどは、もっぱら視覚を頼りに行動していますから、生き残ることは難しいでしょう。

鳥類はどうでしょうか。空を飛ぶためには優れた視力は欠かせないように思いますが。

鳥類は聴覚や臭覚も非常に鋭敏であると考えられていますが、大空を自由に飛び回るためには、鋭い視力が必要ですね。昼行性の鳥が座頭になったら命も危ういでしょう。

鳥は鳥でも夜行性の鳥は別です。あるとき白内障におかされた盲目のフクロウが発見されましたが、そのフクロウは痩せるどころかよく太っていたそうです。その秘密は聴覚にあります。フクロウの聴覚は、昼行性の鳥類の数倍も鋭敏であることが知られています。フクロウもまた、座頭になったとしてもあまり困ることはないと思われます。

優れた聴力が視力を補って余りあるのですね。では次回、哺乳類の場合についてもぜひお話を聞かせてください。

哺乳類が座頭になったら？ ～座頭の動物たち（2）～

前回はもし動物が座頭になったら、とうテーマで魚類、鳥類についてお話をいただきました。そして次は哺乳類の場合についてですね。

哺乳類はサルやヒトなどを除いて一般的に視覚よりも聴覚や臭覚のほうが鋭敏です。イヌやネコなどは、臭覚や聴覚が鋭いので、座頭になったとしても、何とかエサを見つけたり、敵から逃れることが可能でしょう。

ゾウも、もともと視覚はあまり鋭敏ではなく、頼りにしているのは鼻なのです。ゾウは、5キロメートル先の臭いを感じるという大変な鼻の持ち主です。

ゾウの鼻は大きいばかりでなく、大変優れた感覚器官なのです。

モグラやクジラなども座頭になったとしても生存するのに大きな影響はないと考えられます。もともと視覚を頼りに生きているわけではないからです。モグラは臭覚を、クジラは聴覚を頼りにしていて、視覚はほとんどありません。

視・聴・臭の感覚の重要度が、それぞれ異なっていますが、哺乳類は意外に視覚に頼っていない動物が多く、座頭になっても生きていける場合が多いようです。

近所に失明に近い状態のイヌがいますが、時々柱に頭をぶつけているそうです。優れた臭覚でエサのありかはわかっても、障害物の所在は判断できないのでしょうか。

そうですね。しかし座頭になっても障害物を巧みによけて運動できる器用な動物もいます。コウモリは自ら超音波を発信し、障害物やエサなどに当たってはね返ってくる反射音波を聞きながら運動しています。イルカも同様の超音波を発信して運動しています。



また、魚は体の両側にある側線器によって、障害物をよけて運動することができます。この側線器は、わずかな水の振動によって水の流れの方向や速さ、水深、水中の物体の存在と距離などを測定感覚できるようになっています。魚は目が見えなくても障害物の存在を知ることができるのです。

コウモリやイルカ、魚たちは、仕込み杖に頼って歩く座頭市よりも感覚という点では一枚上手のようですね！

『二十四の瞳』 英語でどう訳す？

先日久々に『二十四の瞳』を読み返しました。初めて手に取ったのは随分昔のことになりますが、感動が色褪せることのない作品ですね。

昭和三年、小豆島の小学校の分教場に赴任してきた大石先生と一年生十二人の教え子たちとの物語でしたね。昭和二十七年に発表された二年後に映画化されて空前の大ヒットとなり、海外にも翻訳、紹介されたと聞いています。

英語訳された『二十四の瞳』の題名については、なかなか面白い話があります。今日はその話をしましょう。

英語にそのまま訳すと“Twenty-four pupils”などとなりますでしょうか？

“pupil”には二つの意味があります。一つは「生徒・児童」の意味、もう一つは「瞳・瞳孔」の意味です。もしも先の題名だとすると、「二十四の瞳」か「二十四人の生徒」の意味かはっきり分かりませんね。

以前、丸善の「本の図書館館長に問い合わせ、教えていただいたところ、



“Twenty-four eyes”という題名で、昭和三十二年に英訳出版されたということでした。「二十四の瞳」でなく「二十四の目」では多少文学の薫りが薄れるかもしれませんが、紛らわしいpupilという単語を使うのは避けたようです。

「二十四の目」ですか…確かに随分趣の違う題名になりますね。Pupilにはなぜ「瞳」と「生徒」という紛らわしい二つの意味があるのでしょうか。

Pupilの語源は、ラテン語のpupillaです。pupillaという単語は、pupa(少女)、pupus(少年)の指小語「小さい」を表す接辞のついた単語で、もともと小さな子どもという意味です。それがなぜ瞳という意味にも使われるようになったかということ、眺める人の小さな像が瞳孔に映って見え、まるでそこに小さな子がいるように見えるからのようです。翻って見れば、中国語である「瞳」は「目の童」と書きますし、日本語の「ひとみ」は「人見」のことです。発想は洋の東西を問わず同じであるようです。

動物も眼の病気になるの？

ム トウ先生、動物も白内障などの眼病になったりするのでしょうか？

動物の目もヒトと同じようにありとあらゆる眼病が現れますよ。結膜炎、角膜炎、白内障、緑内障、眼底疾患、各種の先天異常などが代表的なものです。あまり関心が払われないものとして、近視などの屈折異常、斜視、弱視、眼精疲労などがあります。

眼の病気に関してはヒトとあまり変わらないのですね。

そうですね。ただ、動物の目の病気に関しては、ヒトと異なる点が二つあります。一つは喧嘩によるケガが多いことです。もう一つは、病院に来るのが決して患者自身の意志ではなく、飼い主の意向によるということです。ヒトの場合は、痛いとか見にくいとかの自覚症状があれば自ら医者にかかりますが、動物は自覚症状を訴えることはありません。

確かに動物の場合は、外から見てわかる異常がなければ気が付かないかもしれません。

目やにが出て充血する結膜炎や角膜炎、強い充血が起こって瞳が混濁する前部葡萄膜炎、瞳が白くなってくる白内障などが、どうしても目立つようになります。白内障などは、人間ばかりでなく動

物の目でもポピュラーな疾患となっていて、手術も盛んに行われています。

逆に眼底疾患や緑内障は視力障害が相当進行しないと飼い主に気付かれません。緑内障で医者に連れられてきたときは、ほとんど失明している場合が多く、動物眼で行われる緑内障手術は、視機能の回復や維持というより、痛みをやわらげたり美容的な意味（眼球の突出を防ぐ）で行われるようです。

動物の眼も人間と同じように手術による治療がされているのですね。

驚くべきことに、動物に対する美容整形手術なども結構盛んに行われているようです。血統書付きの高級ペットほど盛んなようですが、もっと自分のペットを個性的にしようというのでしょうか。すべて飼い主の一存で手術が行われているようです。果たして手術される動物自身は喜んでいるのでしょうか、一度聞いてみたいものです。



動物の出目、ヒトの奥目

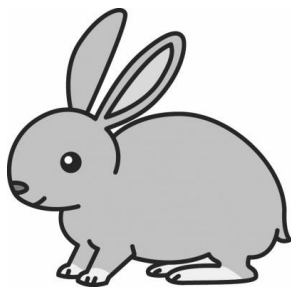
△トウ先生、わたしは少々出目のようなのですが、目にとって良くないでしょうか。

世の中には、出目の人、奥目の人、そしてちょうどいい人とさまざまありますが、特に悩んだり、気に病む必要はありませんよ。出目の利点は突出している分だけ視野が広がることであり、奥目のいい点は奥に引っ込んでいる分だけケガをしにくいことです。出目の人は、自分は他の人より広々と見えているのだと思えばいいでしょう。ヒトはもともとサルと同じように奥目の動物のようですが、脳が発達するにしたがって、脳の容積が増え、その分だけ眼球が前に押し出されて奥目であることが目立たなくなったようです。

動物の場合は、奥目と出目、どちらが多いのでしょうか。

一般的に草食動物はひどい出目、肉食動物は軽い出目、そしてヒトとサルの霊長類だけが奥目のようです。これはそれぞれの目の役割からすると、非常に理にかなっています。

ウサギやウマなどの草食動物は、肉食動物から身を守るために、どの方向から敵が来てもすぐ発見し、逃げなければなりません。草食動物の目は顔の側面について出目なので、ほぼ360度の広い視野を得ています。



肉食動物も出目ということですが、肉食動物にとっての利点は何ですか？

獲物を追いかける側の肉食動物は、自分の前方面面がよりよく見えること、しかもある程度視野が広いことが必要です。ですから、目は顔の前面についていますが、両目は軽い出目で少し斜視のように完全に正面でなくて外を向いています。一般的に動物にとっては、より広い視野を得ることが目の大きな役割です。出目であることは大変好都合なのです。

ヒトは奥目の動物ということですが、その方がヒトにとって好都合なのでしょうか。

私たち霊長類が他の動物と大いに違う点は、上肢（手）が自由に使えることです。手先の仕事をするには手元がよく見えなければなりません。ヒトの目は顔の前面に並んでついていて、手元や正面を両方の目で見るようになっています。広い視野を得ることは目の配置上困難ですから、今さら出目である必要もなく、ケガをしにくい奥目になっているのかもしれないね。

世界が恐れた眼病とは ～トラコーマの歴史(1)～

すっかり花粉症にやられてしまって目が痒いです。この時期は辛いですね。

私のところにみえる患者さんたちも随分辛そうですね。しかし正直な所、花粉症の患者さんを相手にしている分には気が楽なのです。間違っても失明に繋がる病気ではないからです。少し以前の眼科医が、失明の恐怖に曝された患者さんと共に、トラコーマと戦っていたことを考えれば、ずっといいですよ。

トラコーマについてはあまり知らないのですが、どのような眼の病気なのでしょうか。

トラコーマはトラコーマ病原菌による伝染性の眼の病気で、非常に強い結膜炎を起こし、やがて角膜にも濁りを生ずると失明することもある病気です。戦前の日本では失明原因の第一位を占め、大いに猛威を振るった疾患です。

恐ろしい病気ですね。トラコーマはどのような由来の伝染病なのでしょうか。

トラコーマは元々エジプトやメソポタミア地方の風土病でした。これが8世紀以降、イスラム帝国の成立および、チンギス・ハンの大遠征で西はスペイン・ポルトガル、東は中国まで広がっていったのです。15世紀から16世紀にかけては、スペイン人やポルトガル人

の探検家たちによって、新大陸へとトラコーマが伝播されていきました。

そして19世紀、ナポレオンのエジプト遠征により多くの兵士がトラコーマにかかり、彼らの帰国によりイギリス・フランスにもトラコーマが蔓延することになったのです。

トラコーマの伝播には戦争が大きく絡んでいるようですね。



トラコーマにはmilitary ophthalmia (軍隊眼炎)という別名がありますが、まさに言い得て妙ですね。ナポレオンの戦争時、イギリス軍のある大隊では、兵士700人のうち636人がトラコーマにかかり、そのうち両眼失明した者50人、片眼失明した者40人に及んだといわれ、その感染力のすごさがうかがえます。

本当に恐ろしいことですね…。そのようなトラコーマが日本に伝わった時のことを、次回ぜひお聞かせください。

日本人とトラコーマ ～トラコーマの歴史(2)～

前回は伝染性の眼病トラコーマが世界中に広がっていった歴史についてお話しいただきました。その恐ろしいトラコーマが、日本に伝わったのはいつなのでしょう。

チンギス・ハンの大遠征によって、お隣の中国にはかなり古くからトラコーマがありました。しかし日本には殆ど伝わっていなかったようです。これは日本が島国であったことが幸いしていたようですね。日本にトラコーマが蔓延するようになるのは、御多分にもれず戦争をきっかけとしてでした。明治27年に起こった日清戦争で、日本の兵士が大挙して中国大陸に渡りましたが、この兵士達がかの地でトラコーマをもらい、これを持ち帰ってから、日本にも猛烈な勢いで伝染するようになったのです。

トラコーマは明治時代に伝わったのですか。やはり日本でも戦争が契機になったのですね。

トラコーマがどれだけ慌しく日本に渡来したのかというのは、その名前をみてもわかります。病気の名前というのは、日本語でも名付けられているのが普通ですが、トラコーマだけは余りにも急速に日本中に蔓延したために、日本語の病名を名付ける暇がなく、唯ラテン語のTrachomaを片仮名にただけになっています。

Trachomaというのは、ラテン語のtrachys(ざらざらな)+oma(できもの)という意味です。トラコーマは、まぶたの裏の結

膜に「つぶつぶ」ができて、眼がゴロゴロと痛むのが特徴であるが、そんな所からこのような名前が名付けられたのでしょう。

恐ろしい眼病のトラコーマですが、現在の日本ではその名を聞くこともありません。

日本において、実際にトラコーマが猛威をふるった期間はわずか50年くらいでした。戦後の抗生物質の開発、公衆衛生の充実によって、日本においてはほぼ撲滅された病気です。日本人にとって、トラコーマとの戦いはまさに一陣の風のようなものであったわけですが、その印象は今なお強烈なのです。



人類を繁栄させたヒトの目の特徴とは？

△トウ先生、これまでに数多くの動物の眼についてお話しいただきましたが、私たち人間の眼についてはどうでしょう。他の動物にはない特徴はあるのでしょうか。

視覚のある意味での鋭敏さという点では、ヒトの眼はタカ、ウ、ツバメなどの鳥類、カメレオンなどに劣ります。ただヒトの眼には他の動物にはない大きな特徴を2つ持っています。まずひとつは共同性の眼球運動がすぐれており、特に“より目”が出来ることです。もうひとつは視覚による想像力が豊かなことです。

より目と想像力…それはどのように役に立つのでしょうか。

より目が出来るということは、遠方だけでなく近方も両眼視して立体的に見ることが出来るということを意味しています。視覚による想像力が豊かであるということは、たとえばマンガや絵画を見て、あたかも実物を見ているのと同様に状況を把握できるということであり、人類が文字を生み出すことができた所以です。

この2つの眼の特性が、人類が他の動物を凌駕し地球を支配するようになった大きな要因となっています。

力が強いとはいえ人類が地球を支配するようになったのは、他の動物以上の知恵が与えられていたから、とも言われますね。

決してそれだけではなく、ヒトだけが持つ解剖学的な特性と眼の特性によるところが大きかったのです。少し説明していきましょう。解剖学的にヒトが他の哺乳動物と異なる点は、直立歩行、オトガイ（下顎）の発達、表情筋があることの3点とされています。



直立歩行によって上肢（手）を自由に使うことが出来るようになり、より目ができることで手先の仕事を容易になり、火や道具の発明や使用を可能にしていたはず。また、オトガイの発達により複雑な発声が可能になり集団の中に言葉が生まれました。そして視覚による想像力が豊かなことが更に文字を生み出すことになり、コミュニケーション手段を一層発達させることになったのです。

知恵だけではなく、ヒトだけが持つ解剖学のおよび眼の特性が生み出した道具や言語というものが、他の動物を凌駕していく大きな武器になったのですね。

こんなに違う、肉食動物と草食動物の眼

△トウ先生、動物公園でウサギを見てきたのですが、人が後ろから近づいてもすぐに逃げてしまいますね。後ろに眼があるかのようです。

ウサギはほぼ360度の視界を持っています。つまり自分の周り全周が常に見えているといい、敵に追いかけられたときには真後ろの敵を見ながら逃げると言います。まさに背中に眼があるようなものです。

ウサギだけでなく、ウマ、リスなども360度の視界を持っています。ウマの章でもお話ししましたが、競馬の場合は却って広く見えていると、観客席の騒ぎなどで気が散ってしまい不都合です。そのため、競馬の際には前方だけが見えるような遮蔽板をつけて走ります。

360度見えるというのはすごいことですね。それは眼の位置が関係するのでしょうか。

ヒトの眼は顔の前面に並んでおり、両眼の視線の方向はほぼ平行です。これに対して、ウサギの眼は顔の側面についており、右眼と左眼の視線の方向はほぼ背中合わせに近いものです。しかしながら、両眼視している部分は狭いので、立体感や距離感は悪いはず

です。一方、肉食動物であるライオン、クマ、タカなどの肉食動物は、両眼軸のなす角が小さく、視界は狭くなっています。

草食動物と肉食動物では、見え方や視界が異なるのですか。

肉食動物は視界が狭いのに対して、草食動物は広い視界を持っています。肉食動物は他の動物を見つけて捕らえなければならず、そのためには自分の正面がよりはっきりと見える必要があります。一方、草食動物は肉食動物から逃げなければならず、そのためにはどこから敵が来てもすぐわかる必要があります。

動物たちの視界の広さが、必要性に非常に適応した形になっているとは驚きです。

そういえば、動物園で人気の高いパンダは、数千年前までは中国大陸においてあたかも百獣の王のようにふるまっていた肉食動物でした。それがトラに駆逐され、次第に高山へと追いやられ、食用になる動物が十分に得られなくなったためにやむなくササの葉などを食べるようになりました。パンダが肉食動物であった名残りはその眼に残っています。ササの葉ばかり食べていても、その眼は草食動物の眼ではなく、両眼軸のなす角が小さく視野が狭い肉食動物の眼をしています。

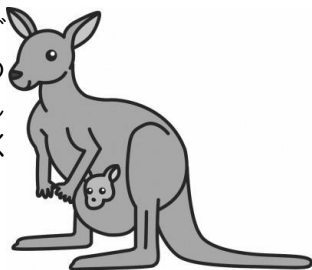


動物の遠視と近視

先日視力測定を受けたら、近視の度が進んでしまったようです。そういえばムトウ先生、動物の目に近視や遠視はあるのでしょうか？

遠視に関していえば、サメやエイなどの軟骨魚類、哺乳類ではカンガルーやモグラ、ネズミ、コウモリなどが強度の遠視の目を持っています。こうした動物に共通しているのは、いずれも皆視力があまりよくないことです。

そもそも遠視の目は、目の屈折力に対して眼軸の長さが短い目であり、ある意味では発育不良の目とも言えますね。



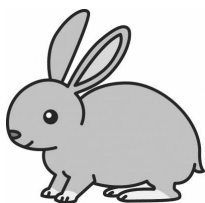
そうなのですね。人間も、生まれたばかりの頃は遠視なのだと言ったことがあります。これもつまり目が未発達ということなのでしょうか。

人間は成長して視力も発達するに従って眼軸長が長くなり、およそ7～8歳頃に正視になることが多いと考えられています。そこで生まれつき強い遠視の場合には、メガネなどで早くから矯正し、視力を良好に発達させれば正視化が早くなります。つまり、よく見える状態にしておけば、眼球が適度に発育して正視になっていくわけです。

しかしサメやエイ、カンガルーやモグラなどの強度の遠視の動物で、

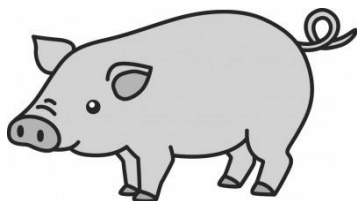
ほとんど視力が無いものは、物をはっきり見ることがないので、正視化を促す眼球の発育も起こりません。ですから、発育不良ともいえる強度遠視のままにとどまっていると考えられます。

近視の方はどうですか？近視の動物もいるのでしょうか。



野生の状態では、近視の動物はそれほど多くありません。硬骨魚類は一般的に近視ですね。魚は薄暗い水中で活動していますから、遠方を見ようと思ってもなかなか見えません。自分の近くしか見えない環境で生活しているの、近くがよく見える近視の

方が好都合といえるでしょう。ウサギやブタなどは、野生状態ではほぼ正視ですが、家畜として飼われていると、近視であるものが多いといわれています。狭い囲いの中で生活していると、自然と近くばかりを見ることが多くなり、これが近視の原因になると考えられています。



薄暗い所で生活している魚や、近くばかりを見ている家畜が近視なのですね。人間も同じでしょうか。薄暗い所で近くばかりを見ているような生活には気を付けなくてはなりませんね。

眼は心の窓 ～心因性視力低下とは～

最近はおしゃれなデザインの子ども用のメガネが増えましたね。大人のような流行のデザインを探している女の子とお母さんを見かけましたよ。

小学校の高学年くらいから近視のお子さんも増えてきますね。メガネをかけずに頑張ってしまう子もいますが、黒板の字が見えないまま頑張っていると、特に理科系の教科の成績が落ちやすいというデータもあります。見かけを考えて躊躇して、知らず知らず知的発育を妨げてしまうのは好ましくないでしょう。魅力的なデザインのメガネが増えて、前向きにメガネを装用してもらえるのはいいことです。

小学生の中～高学年頃は、精神的にもデリケートな時期ですね。親御さんも気を遣うことが多いでしょう。

親子で多少意見がぶつかり合うくらいは成長の過程かもしれませんが、ただ、小児によく見られる心因性視力低下のような心配なケースもあります。精神的ストレスが鬱々と内向し、それを上手に発散できない小児の場合、視力が低下してしまうものを言います。この場合、眼底など眼の中をいくら検査しても病気は見当たりませんが、視野検査で心因性のものに特徴的なデータが検出されるようです。

ストレスに上手く対応できない子どもならではの症状で
しょうか。

ストレスがあったとしても、大多数の子ども達は、それなりに上手に発散させています。ストレスの発散が苦手な子ども達は家庭や学校で乱暴な態度をとったりしてストレスを発散させたりする場合もあります。そして残る極く少数が、ストレスを全く発散させることができない子ども達です。自分一人の胸の内にストレスを抱え込み、やがて「眼が見えなくなる」という形で心の病が外に顕れてくるようになります。



かawaii そうなことです。そのような心因性の視力低下は
治りますか。

原因となるストレスが解消されれば、程なく良好な視力を回復できます。「眼は心の窓」といいますが、単に感情が表れるというだけでなく、視力の低下で心の病いを訴えることもあるということです。子ども達の眼に対して、周りの大人達は十分な注意を払ってほしいものです。

比翼の鳥の泣き別れ ～ 網膜剥離って何？～

『長恨歌』を知っていますか？白楽天が唐の玄宗皇帝と楊貴妃の運命を悲恋物語として漢詩に謳いあげたものです。『長恨歌』中の楊貴妃の言葉「天にあっては比翼の鳥となり、地にあっては連理の枝となって～」という一節があります。私はここで網膜剥離という眼の病気を連想します。

『長恨歌』は『源氏物語』にも影響を与えた長篇の漢詩ですね。「比翼の鳥、連理の枝」は切っても切れない仲の例えとして使われるかと思いますが。

比翼の鳥というのは、胴体が二つで翼が二つしかなく、二鳥共翼で飛ぶと考えられていた空想の動物です。連理の枝というのは、根は二つで幹は合体し一つとなった樹のことです。

網膜剥離は、網膜が色素上皮・脈絡膜と剥離してしまう病気ですが、まさにこれは切っても切れない関係にある組織なのです。



色素上皮・脈絡膜というのは聞きなれない言葉ですが、どのような役割を持つのですか？

脈絡膜というのは、血管が網目のように張り巡らされている組織で、常に大量の血液が流れていて、網膜を支える重要な役割を二つ持っています。

一つは車というラジエーター（冷却装置）のような役割です。人が目を開けて物を見ると、外界からの光が網膜で焦点を結びます。虫眼鏡で太陽光を集めるように、この部分は熱を持ってしまいますが、網膜が焦げないように冷却装置の役割を果たすというわけです。

もう一つの役割は、網膜の視細胞への栄養補給です。眼の網膜は日中の十数時間に及ぶ連続使用に耐えていくため、視細胞の旺盛な新陳代謝が必要です。色素上皮・脈絡膜が、その速やかな新陳代謝を手助けしています。

網膜から脈絡膜・色素上皮が離れてしまったら、視細胞は活躍することが出来ませんね。

まさに比翼の鳥というべき存在です。網膜剥離はかつて不治の病でしたが、1921年ローザンヌ大学のゴナン教授が手術方法を発表し、その後も彼の手術方法に様々な改良が施された結果、現在は70～90%位は治癒が期待できるようになっています。

とはいえ、やはり早期発見が大切です。視野の一部が暗くなってきたりしたら、速やかに眼科医のもとにかけつけてほしいですね（かけつけるといっても本当にかけたりしないで、できるだけ静かに）。

目のつく地名（1）



『百目鬼の謎』（藤井耕一郎・草思社文庫）

私と同じ『見る』ことを仕事にしている友人から「面白いよ」と薦められ、『百目鬼の謎』～目のつく地名の古代史～を、読んでみましたので、感想と私の考察を少々。

奈良県明日香村で高松塚古墳の壁画が発見されておおよそ五十年。その後も稲荷山古墳の鉄剣銘文や荒神谷遺跡の膨大な銅剣など“百年に一度の大発見”が相次いだにもかかわらず、古代国家の起源は今なお真相が明らかにされていない。本書は「目」のつく地名に着目し、初めて列島が統一された時代に特異な役割を果たした呪術的な「にらみ」を解明。邪馬台国の成立と、ヤマト政権につながる地理的な情勢を重ね合わせ、政権の中心となった勢力を浮き彫りにする。
(amazonより引用)

古事記などに出て来る神話の「国譲り」。

この本の作者は、

天津神(アマツカミ)は、吉備国(岡山県と広島県東部)のことで、
国津神(クニツカミ)は、出雲国(島根県東部)のことと考え、

国譲り神話とは、この二つの地域が争い、
吉備国が、出雲国を支配下に置いたものだと考えているようです。

この仮説に小生は「なるほど、ごもっとも」と思いました。

紀元1世紀頃は、日本は各地に地方勢力が勃興し相争っていた頃。

山陰地方では出雲国が、因幡、伯耆、出雲、石見の諸地方を支配下に治め、
山陽地方では吉備国が、播磨、備前、備中、美作、備後、安芸など

を支配下に置いていたのだと思います。

そんな地方勢力の内、圧倒的に優勢な勢力を誇っていたのが吉備国だったと思います。

理由は、以下の諸要素により他国を凌駕する強国だったと思うからです。

- ①肥沃な土地のお陰で、豊かな農作物に恵まれていた。
- ②瀬戸内の海上交通の要衝にあり交易に適していた。
- ③海産物に恵まれており、また製塩技術を開発していた。
- ④たたら製鉄技術を開発し、鉄製の武器を作成していた。

以上により吉備国は、恐らく簡単に**出雲国**を屈服させてしまったのかもしれませんが。

出雲国の荒神谷遺跡からは、大量の銅剣、銅矛、銅鐸が発見されています。





Wikipediaより引用

これなど、
無条件降伏させられた出雲国が武装解除をさせられた証拠
のような気がします。

(2)へ続く…

目のつく地名（2）

作者は、
弥生時代（紀元前10世紀から紀元後3世紀中頃）か古墳時代（～7世紀）に、
吉備国（岡山県と広島県東部）が、出雲国（島根県東部）を攻めて支配下においたと考えているようです。

そして、その勢いに乗って吉備国は、
九州や近畿、東日本までも征服して行ったのではないかと考えているようです。

上記の仮説に対して小生は、
前半部分は同感に思いますが、後半部分は首肯しかねます。

弥生時代から古墳時代にかけて、日本は、
筑紫国（福岡）、出雲国（島根）、吉備国（岡山、広島）、大和国（奈良）、
毛野国（群馬、栃木）、越国（福井、石川、富山、新潟、山形）
などの有力な地方勢力が勃興して乱立し、時には相争っていたと思われる。

これら有力地方勢力の中から、吉備国が一步抜け出して他国を支配下に置き、日本を緩やかに統一して行ったのではないかと作者は考えているようです。

しかし小生は、日本を緩やかに統一し首長国連邦のように纏め

て行ったのは、

吉備国ではなく大和国なのではないかと思っています。

そう考える理由は2つあります。

1つは、後年、吉備国は4つに分割されましたが、異議を唱えず大人しく受け入れたこと。

もう1つは、桃太郎伝説の存在です。

7世紀以降、日本をほぼ統一したヤマト朝廷により、律令制度に基づく国郡里制が定められて行きました。

その際、大きな国は幾つかに分割されました。筑紫国は、筑前と筑後に、

毛野国は、上野と下野に、

越国は、越前、越中、越後に。

そして吉備国は何と、備前、備中、備後、美作の4つに分割されてしまいました。



Wikipediaより引用

これは桃太郎伝説の元になった話ですが、ヤマト朝廷によって、吉備国が平定された事実を記録したものと読み取ることができます。

吉備国が日本を平定したのでなければ、なぜ吉備国に特徴的であったはずの「神目」などが全国的に分布しているのだということになりますが、良いものは他国の物でも取り入れようと、ヤマト朝廷が仕組みの中に取り込んで行ったものだと思います。

神目駅



駅舎 (2008年6月)

Wikipediaより引用

(3) へ続く…

目のつく地名（3）

作者は「神目」を「睨み」あるいは「見張り」と考えていますが、そう考えると連想されるのは、「王の目」「王の耳」です。

これは、紀元前5世紀頃に、イラン高原を支配したペルシャ帝国が地方官（サップ）を監視する為に「王の目」「王の耳」と呼ばれる監督官を地方に派遣していた制度です。



ペルシア帝国の最大領域と「王の目」

『世界史の窓』より引用

古代日本に存在した「神目」は、ペルシア帝国における「王の目」「王の耳」のようなものだったのでしょ。

古代、ペルシャ人は日本にも来ていたようですので、そもそも「神目」の制度や概念というものは、ペルシャ人から教わって導入したものだっただけかもしれません。

「神目」の読みとしては、

「カンノメ」「コウメ」あるいは「カンメ」と読まれますが、

「コウメ」「カンメ」と言うといついつい

「コウベ⇒神戸」「カンベ⇒神戸」という語呂が口をついて出てきます。

例えば、

余戸（アマリベ＝愛媛県・宮城県など）余目

（アマルメ＝山形県）

余部（アマルベ＝兵庫県）

など、日本語において「メ」と「ベ」は転化し易いものです。

この地名は、

古代の律令にて、当時の行政単位として家々を50戸ごとに

「里」を作り、

それに満たない家を余りとして記録していたことに由来します。

それが、当時の人々のやり取りの中で訛りも相まって、口伝も漢字も変化していったものと推察できます。

日本には「神戸」という地名が30ヶ所以上、存在します。

その内の大部分は神社の封戸であったが故に

「神戸」と名付けられたのだらうと思われまます。

しかし中には、

「神目」から「神戸」に転化したものもあるかも知れません。

そこで駅名にも使われている以下の5ヶ所の「神戸」について「神目」の可能性がないかどうか考えて見ました。

- ①神戸 (コウベ = 東海道線) ⇒ 須磨の関が近くにある
- ②伊賀神戸 (イガカベ = 近鉄) ⇒ 島ヶ原関が近くにある
- ③神戸 (コウト = わたらせ溪谷) ⇒ 五料関が近くにある
- ④広神戸 (ヒロウト = 養老線)
- ⑤北神戸 (キタコウト = 養老線) ⇒ 不破関が近くにある

関所というのは古来「睨み」を効かせたり「見張る」為の場所、即ち「神目」の場所です。

したがって上記5ヶ所の「神戸」は、

元来は「神目」だった可能性があるのではないかと感じました。

あなたも、ご興味がありましたら、

『百目鬼の謎』～目のつく地名の古代史～

(藤井耕一郎・草思社文庫)

ぜひご一読ください。

今回、3回シリーズでお伝えした『目のつく地名』というキーワードから、日本神話、世界史、そして現在の日本各地の地名の由来など時空を超えて、いろんな角度からそのつながりに想いを馳せることができ、古代の人々が見ていた様々な風景を少し味わえたような気持ちになりました。